

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究の目的は、対象となる韓国人日本語学習者にとって、第二言語である日本語の方が第一言語である韓国語の方に影響を与えるという、一般的に考えた場合、逆の方向からの転移の現象と言える、「逆転移」現象の実態を明らかにするところにある。

従来の言語転移に関する研究は、第一言語である母語の状況が、学習言語や目標言語としての第二言語の習得に及ぼす、さまざまな影響を考えるのが一般であった。しかし筆者の観察によると、そうした従来からの通説である転移現象とは別に、論理だけでは考え難いような逆方向の転移現象がある種の場面で観察される実態があり、韓国人日本語学習者の場合にはその顕著な例が、授受表現の一つである「(日本語の) てもら」に対応する表現において見られるという。

こうした「逆転移」現象の実態については、近年、いくつかの言語の場合に見られるという実態が紹介されつつあるが、比較的多くの学習者人口を持つ韓国語と日本語の場合においても、確実な例があることを実証的に示した本研究は、その点で独創性を有することは間違いなく、また、そうした現象を単なる誤用としては捉えず、両言語の体系のズレに根本的な原因を求めようとする姿勢は、他の言語の場合とも密接に関わる大きな意義を持つ研究であると評価できる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

言語研究における最も正統な方法の一つとして、具体的な用例について実証的に観察・分析を進めてゆくというものがある。本研究においては、韓国人日本語学習者の話しことばや書きことばにおける実態を、さまざまな場面を広く渉猟した資料から掘り上げ、それを基盤として観察や分析を進めているという点で、研究方法における妥当性がよく示されていると考えられる。

またその一方で、たまたま現れてくるような学習者による出現例のみに頼ることはせず、一定の背景や理論的見通しのもとに、アンケート調査・翻訳文調査・許容度調査・作文調査といったさまざまな種類の調査を行ない、それを通して、テーマとする逆転移現象について、使用者の中にある「無意識の意識」といったものを実証的に示しているという点で、これまた言語研究における方法としては、十分に妥当なものであると言える。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

データの収集に関しては、前項でも述べた通り、具体的かつ自然な話しことばや書きことばによる実例と、一定の背景や理論的見通しによる各種調査によるデータが総合的に集められており、この点で適切であるのに加えて、調査協力者として、日本に在住していたり在住の経験がある者といった日本語との関わりの深いグループと、JFL 環境にいるため、同じ日本語学習者でも日本語との関わりの殆どないグループの両者が選ばれており、こうした点でも適切であるものと考えられる。

またデータの分析に関しても、元となる調査資料の性格に基づいて、質的な面からの分析と量的な面からの分析が総合的に行われており、量的な面からの分析の場合も、内容面での必要性に応じて、t 検定などを利用した統計解析が行われており、こうした点でも適切になされていると思

われる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか。

本研究は、これまでも述べてきた通り、基本的に実証的なデータとしての具体的かつ自然な用例と、背景や理論的な見通しによる各種調査によるデータを基盤として行なわれている考察であるため、その手法は十分に客観性を有すると考えられる。また、近年少しずつデータが積み上げられつつある、他言語における「逆転移現象」に関する研究も十分に視野に入れた上で考察が行われているため、結論にも一般性や妥当性があることは間違いない。

また、研究におけるそうした堅実さを証明するものとして、このテーマに関する学会発表や投稿審査における状況を挙げることができる。まず、発表に関しては、2013年の社会言語科学会第32回研究大会における口頭発表が大きな反響を呼び、活発な質疑応答のきっかけになったばかりでなく、翌2014年に同学会より「研究大会発表賞」を受賞している。さらにこの内容は、学会誌としての『社会言語科学』誌にも掲載され、多くの日本人筆者と並ぶ形で、論文掲載の機会をえている。(この内容は、本博士学位論文の第5章に反映している。) また、2015年には、それに続く投稿論文が、韓国において伝統のある二つの学会誌に相次いで掲載される形となり(韓国日語日文学会の『日語日文学研究』、東アジア日本学会の『日本文化研究』)、それぞれ、本博士学位論文の第3章と4章の部分に反映されている。こうした点から見て、本研究が十分な学術的水準に達していることは明らかであると言える。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

本研究は、外国語教育の分野で重要な位置を占める第二言語習得研究において、中心的な課題の一つである言語転移に関する現象の一側面を捉えて、それを実証的な面から検討・分析し、この分野に新しい見地を開いた意欲的なものである。これまで意識されることのなかった「逆転移」という新しい現象に着目しているという点に加えて、他の言語の場合における数は少ないが興味ある現象をも視野に入れた上で、転移現象そのものに対しても、より広い視野からの新しい見方が提示されているという点で、言語教育の分野で高く評価できる研究であると思われる。そうした点から、この研究が「博士(教育学)」という学位に相応しいものであることは間違いなく、本論文の意義や成果が明確な形で評価されることにより、言語教育に対する将来の貢献がさらに期待できるものと考えられる。